

公益財団法人永青文庫所蔵 安井曾太郎発細川護立宛書簡 「一の束」の総合的紹介

佐藤 香里

筆者は、早稲田大学大学院文学研究科博士課程在学中の二〇〇三年から二〇〇五年にかけ、公益財団法人・永青文庫にて、大正教養派の文化圏に属する知識人、ならびに東京美術学校改革によって同校洋画科・日本画科の教授となった梅原龍三郎・小林古径・安井曾太郎・安田靉彦（あいいうえお順）が細川護立に宛てた書簡の調査ならびに翻刻を行った。

内訳は以下の通りである。

画家・梅原龍三郎 二三五通のうち一六通^①／小林古径 全二通^②／安田靉彦 全四通

大正教養派知識人・安倍能成 全三通／上野直昭 全一通／岡部長景 全一通（伊藤忠太書簡在中）／児島喜久雄 全一通／矢代幸雄 全二通

このうち安井曾太郎に関しては、拙稿「白樺派による日本近代洋画アカデミズムの転換とその背景―安井曾太郎の肖像画制作をめぐる―」（早稲田大学美術史学会『美術史研究』第四二号、一六九頁～一九〇頁、二〇〇四年）との関連で全一二六通の書簡を閲覧し、翻刻した。当時は未だ必要であった著作権上の配慮や筆者の力量不足を理由として、調査の成果は必ずしも論文に完全には反映させることができなかった。しかし、蓄積したデータは大正教養派の知識人、ならびに上記の画家たちが細川護立のパトロネージをいかに享受したかの貴重な証言となっている。

些か私事に及ぶことをお許し願いたいだが、筆者は二〇一三年から二〇二二年まで、埼玉県立歴史と民俗の博物館（旧称 埼玉県立博物館）に学芸員として勤務し、埼玉県における近現代文化の研究に従事した。安井は埼玉県大里郡寄居町（当時）で戦時疎開の生活を送っている。このため、昨年度の同館『紀要』掲載の拙稿「安井曾太郎から細川護立への書簡 疎開地・寄居を中心に」（『紀要』第七号、埼玉県立歴史と民俗の博物館、七一～八二頁、二〇二三年）において、戦中戦後の安井

発細川宛書簡の報告を行った^③。

しかし、最も望ましいのは、細川に出会って以後の安井の全活動期を通して書簡の検証を行うことであり、本来的に本資料は埼玉という地方性に拘束される性質を持つものではないため、永青文庫のご許可を得、この度機会を改めて安井書簡「一の束」全四五通の公開を行う。

細川宛安井書簡は、永青文庫においては五つの束に分割して保管されている。これは細川が同書簡を保管したときと同じであると調査の折、当時の学芸員・阿部純子氏に教えていただいた。現今の美術史学におけるアーカイブ資料の自律性を重要視する視点からも、本稿ではこの順序を大切に、「一の束」を公開する。

なお、本稿では書簡の内容を一覧に提供することを目的とし、紙幅の都合上、書簡の内容に基づいた筆者自身の論考については別稿に譲ることとしたい。また、残念なことだが、同様に紙幅に限界があるため、安井作品の図版を載せることを今回は見送ることとした。筆者の研究者としての所信が、図版のない美術史の論文を書きたいということにあることも関連するため、これを付記する。

一―^④ 封、便箋（消印）昭和十二年六月二四日

安井曾太郎 熱河省承德旧銀庫胡同一號／関東軍御指定満鉄御指定 承德

ホテル／電話（七五／四一九）安井曾太郎／本店 天津日本租界花園街大和ホテル

細川護立 大日本東京市小石川区高田若松／町七六／侯爵細川護立様

拝啓 其の後御無沙汰いたしました お許し願ひます 大分／お暑くなりましてが皆様おかわりござりませんか この／頃は政変にて定めしお忙しい事と存じます 先日とはわざ／＼／高野氏お越しにて留守宅にお見舞の美事なお菓子／を頂きました由 誠に難有厚く御礼申し上げます 小生／当地に参りまして少し腹をこわし 寝てしまひましたが もう／殆どよくなりましたので 医者の許しもあり 二三日の内に仕事／を初めたいと思つてゐます その様な訳でまだかけ／の絵しか出来てゐませんので少し淋しく思つてゐます 併し／帰る迄には少しでも描いて行きたいと思つてゐますので帰／京は予定より少し延びると思ひます 藤島氏とはず／うと一所でしたが同氏は十四日にこゝを立たれ帰途につかれ／ました 川端龍子君もこゝへ見えましたが十七日に立たれ／

ました こゝは日中は相当あついですが 朝夕は涼しく気持ち／がよろしいです 満州はのん気です 内地にゐるとてもこの／様にのん気にねて居られる様な気がします 併しからだがよ／くなると早く制作したい気になります 喇嘛寺は実に美／しいです どこでも絵になる様ですからどこから描いてよいかま／よう有様です 一水会の同人展覧会が七月五日から高嶋／屋であるのです が絵が出来なくつてこまつて居ります／ご病気の神経痛の一日も早き御全快を祈つて居ります／乍末筆皆様に宜敷御鳳声お願ひ申上げます／先は御礼旁々御無沙汰御詫び迄 敬具／六月二十一日／安井曾太郎／侯爵細川護立様

一一二 封、便箋（消印）昭和十二年七月二日

安井曾太郎 熱河省承德旧銀庫胡同一号／関東軍御指定満鉄御指定 承德

ホテル／電話（二七五／四一九）安井曾太郎／本店 天津日本租

界花園街大和ホテル

細川護立 大日本東京市小石川区高田若松／町七六／侯爵細川護立様

拝啓 追々暑くなりました 御機嫌よろしき事と／存じます 先日は小生病気につきわたくし目白の／宅へお電話を頂きました由 誠に難有喜んで居ります／厚く御礼申し上げます 以陰すつかりよくなりま／して二十五日から写生に出かけて居ります 乍他事／御安心願ひます 折角ここ迄参りましたのですから／少し描いて帰りたいと思つて居りますので来七月十日／頃迄滞在したひと思つて居ります ただ今この宿屋／で御友人の島村孝三郎氏にお会ひいたしました色々おはなしいたしました 同氏は一行十人計りで熱／河地方の考古学的な調査な来られたそう／です 大変面白い気楽な方でした／芸術院美術部の侯爵のお出ましによつて無事／におさりました由 承知しまして喜んで居ります 定／めし御迷惑だった事と存じます 小生個人とし／ましては帝国美術院もなくなりましたし丁度幸ひ／当分静かにして居りたい様な気か（マ）いたして居ります／何れ御意見をお伺ひいたしまして定めたいと思つて居ります／病氣中に景色かすつかり変りました ケシの花も盛／りが過ぎまして今油を取つて居ります 毎朝人力／車で喇嘛廟に通ふのも吞気です／御自愛を祈つて居ります 右御礼迄 敬具／六月三十日／安井曾太郎／侯爵細川護立様

一一三 封、巻紙

安井曾太郎

記載無

細川護立

記載無

御手紙拝見いたしました 態々御／同封下さいました「承德の喇嘛／廟」及び淡彩の画料正に頂／戴いたしました 大変喜んで居り／ます 難有御礼申し上げます ます ま／た画室にてのお写真額縁に／お入れ下され 遠慮なく頂きま／した 非常によく撮つて驚いて／ゐます 誠に嬉しく厚く御礼申／上げます 淡彩の額縁のびく／になりまして申訳ございません 何卒お許し願ひます／漸く出来て参りましたからお届／け申し上げます お調べの上お受／取り願ひます／先日児島君（※喜久雄―筆者注）に会ひまして御／風邪の事承知いたしお案じ申／してゐました 寒さ厳敷折／柄お大事に願ひ上げます 而して／御全快御暇の節御来／遊お待ち申して居ります／金蓉はおついで折にて決行で／す御本人御上京の事愉快です／楽しみ待つて居ります／御多幸なる新年をお祈り申／上げます 敬具／十二月三十一日／安井曾太郎／侯爵細川護立様／愚妻よりも宜敷申して／居ります

一一四 封、巻紙（逡達）（消印）昭和十四年一月二日

安井曾太郎 淀橋区下落合一ノ四〇四 安井曾太郎

細川護立 小石川区高田老松町七六 侯爵細川護立様

謹啓 御無沙汰申して居ります／おかわりござりませんかお伺ひ申／し上げます 先日児島君から御／所蔵のセザンヌ拝借の儀お願／ひ申し上げましたところ快く御承諾／下さいまして誠に難有喜び御厚／意の程感謝いたして居ります／つきましては二十二日午前小生拝／借に参上いたしますから乍御迷／惑何卒宜敷お願ひ申し上げます 尚一水会は二十三日より十二／月五日迄にて御寸暇の節御覧下／さいます様お願ひ申し上げます／先は以書中御礼旁々御願ひ申／し上げます 敬具／十二月二十日／安井曾太郎／侯爵細川護立様／愚妻よりも宜敷／申して居ります

一一五 封、便箋（消印）昭和十七年三月一〇日

安井曾太郎 神奈川県湯河原平山荘

侯爵細川護立様 東京市小石川区高田老松町七六

御手紙頂きまして恐縮して居ります難有存じまゝす大変御無沙汰いたし失礼して居ります お許し／願ひます 小生御陰様にて治療あともすつかり／よくなり元気で仕事も少々して居ります 何卒御安／心願ひます 今までの苦しみを忘れ随分気持よ／くなり喜んで居ります うまく出来ないで困つてゐまゝ／すが大観翁写真会に間に合へば出席いたしたい／と思つて居ります 宿は今客少なく高台で静／かで見晴しもあり滞在には好都合です 此の間内／は梅の盛りでしたがもう追々散りつゝあります景／色もなんとなく春めいて来ました 先日警報には／少々緊張しました 今頃は東京の空中戦が／初（ママ）まつてゐるのではないかと思つたりしまして変な／気持でした 然しこちらでは至極静かでした 今／宿の一番上の部屋に居ります 湯殿迄上り下りが小生／には手がですが運動のつもりで居ります／まだ仲々お寒うござります 何卒御自重の程／祈つて居ります 敬具／三月九日／安井曾太郎／侯爵細川護立様／今院展の荒井寛方氏が同じ宿に居られます

一一六 名刺

安井曾太郎 東京都淀橋区下落合一丁目四〇四番地／電話大塚三四六五番
先日は失礼いたしました／わらび沢山頂きまして誠に難有／存じます 喜んで居ります 厚く御／礼申します 侯爵細川護立様

一一七 封、便箋（消印）昭和二七年八月三日

安井曾太郎 神奈川県湯河原町天野屋別荘
細川護立様 東京都文京区小石川局区内関口台町二十六
拜啓 其の後大変御無沙汰いたし失礼いたし／て居ります 随分お暑くなりました 御健／康の方は如何でしょうか（ママ） 何卒お大切にお願／ひ申します 以てお蔭私共無事に過して居／ります 一水会の制作に少々取りかかり（ママ）ています／今年は久し振りにモデルを使つて見ました 学／校の勉強画の様になつて困つています 幸画／室の方は風通しよいので幾分助かります 先／日来は美術出版社刊行の小生の画集につき／御所蔵の拙作撮影方色々御配慮に預り御／厚意の程 誠に難有感謝して居ります お蔭／様にて第二輯も希望の作品を入れることが出／来ます様で喜んで居ります 唯印刷の方が少々／心配ではあります 愈々桃の季節になりまゝ／した 例の白桃をお送りする様初平に申して

／置きました いい味になりましたら お送りすることと存じます 着きましたら御笑味願／ひます／乍末筆御奥様によりしく御風声願ひます／先は乍略儀以書中暑中お見舞旁々御礼迄 敬具／安井曾太郎／細川護立／愚妻よりもよろしく／申して居ります

一一八 はがき（消印）昭和一〇年九月二二日

安井曾太郎 新京ヤマトホテル
侯爵細川護立様 東京都小石川区高田老松町七六
謹啓 先日渡満の節は高野氏態々お国御名／葉毒消丸頂き誠に嬉しく御厚志難有厚く御／礼申し上げますお陰を以て汽車、船共楽々と／十三日朝無事新京に到着いたしました何卒／御安心願ひます 着後毎日昼夜忙しく過し／てゐます 食物の關係ですから調子／至極よろしく元氣にいたして居ります 展覧会／用事も今日で了りますので今夕の汽車で愈々／北京に乗り込む事になりました 北京に着けば／また展覧会鑑別です、大同の方へも行つて見たいと思つて居ります／先は御礼迄 敬具 九月二十一日

一九 はがき（消印）昭和一〇年九月二二日

安井曾太郎 長野県上高地温泉ホテル
侯爵細川護立様 東京都小石川区高田老松町七六
御無沙汰いたして居ります お／かわりございませんか こちらは／大分秋らしくなりまして山／の上の方はすつかり紅葉し／て居ります 仲々美しく秋の景色も一寸見て帰りたい／と思つてゐます 来月十日頃に／なるだろうと思つてゐます／毎日自然の立脈（ママ）さ大さに／うたれてゐます 自分の絵が／実に貧弱に見得て悲観／しますこの間お弁当持参で／徳沢園に行つて見まして一日を／過しました／穂高が美しく紅葉／の所もありきれいでした／（絵の部分この山はむつかしい／山です実際見／ると怪異な不／思議な姿です／が描くと平凡な／山になつてしまひ／ますむつかしい山です 今独立の高島君／が来てゐます

一二〇 はがき（消印）昭和一六年八月八日

安井曾太郎 長野県上高地温泉ホテル

侯爵細川護立様 東京都小石川区高田老松町七六

赤倉から児島君との／おたより頂き喜んで居ります 定めし児島君／よき滞在と思つて居ります ドカン仲々盛んでし／ようと思つて居ます ち／ら漸く元氣になつて来／ました これから少しは仕／事はおどる事と思つて／ゐます 今前の霞沢か／ら十五夜の月が出ました／バスも上高地に来る様になりました

一―一 はがき（消印）昭和一六年一二月七日

安井曾太郎 和歌山県東牟婁郡西村湯の峰

侯爵細川護立様 東京市小石川区高田老松町七六

紀州を廻つて居ります／今日は澁から本宮を経てこちらへ／来ました 此所湯の峰は／素朴な山の温泉場で／仲々よろしいです 明日は／高野山へお参りしたい／と思つてゐます のん気／な旅行です 愚妻より／もよろしく申して居ります

一―二 はがき（消印）昭和一六年一二月一日

安井曾太郎 紀州白浜温泉古賀浦六合荘内

侯爵細川護立様 東京市小石川区高田老松町七六

先日は失礼いたしました／態々お電話頂きまして／誠に難有存じました 先／月二十九日に白浜に参り／ました 温泉に入つてのん／きにして居ります 昨日／あたりこちらを立つて／南紀名所を見物して／帰りたいと思つて居りま／す 帰京お目にかゝるのを／楽しみにしてゐます 愚妻よりもよろしくと申し／て居ります

一―三 はがき（消印）昭和一八年八月七日

安井曾太郎 長野県上水内郡信濃尻村大字野尻字神山別荘番号八十六

侯爵細川護立様 東京都小石川区高田老松町七六

（表）今日は突然お邪魔／いたしまして色々御馳走／になりよき赤鉛筆沢／山と写真（大観会の実／によくとれました）を頂き／誠に難有存じまし／た久々にて海野さん初め／皆さんにお会ひ出来先／年の赤倉行を想ひ出／し喜びました 帰途御東／ご心配下され感謝いたし／て居ります 不取敢御礼迄

（裏）帰りには登山／法を実／行柏原駅か／ら山荘迄休／みなしに楽に／無事帰つて来ま／した／御安心／願ひま／す／赤倉の妙／高 実に／美しく 好／きでした 愚／妻よりも宜／敷申して居／ります 八月四日

一―四 はがき（消印）昭和二三年一月一日

安井曾太郎

侯爵細川護立様 文京区高田老松町七六

謹賀新年 昨年病中は色々難有ござりました／想ひ出し感謝いたして居ります／昭和二十三年一月初旦／新宿区下落合一ノ四〇四／安井曾太郎

一―五 はがき（消印）昭和二三年五月一七日

安井曾太郎 法隆寺にて 東京市淀橋区下落合一ノ四〇四

侯爵細川護立様 文京区高田老松町七六

関西へ用事で来ま／した ついでに法隆／寺を久し振りで見／ました 生憎日曜で模写はなく壁画／は見られませんでした／が雨の法隆寺は仲々／きれいです／お角力御招待に預／り難有存じました／こちらへ参りましたの／で残念に存じます 五月十六日

一―六 封、巻紙（消印）昭和一四年六月二日

安井曾太郎 淀橋区下落合一ノ四〇四

侯爵細川護立様 小石川区高田老松町七六

謹啓 其の後御機嫌およろ／しき御事と存じます 昨日は／お角力御招待に預り難有存／じました 二場所欠席いたし久／し振りにて両人大喜び大変に／面白く拝見いたしました 厚く／御礼申します／児島君帰つて来ましてにぎ／かになつて欣んで居ります／其の内御来遊をお待ちして／居ります／不取敢以書中御礼申し上げ／ます 敬具／五月二十一日／安井曾太郎／侯爵細川護立様／愚妻よりも宜敷御／礼申して居ります

一―七 封、便箋（消印）昭和二八年六月七日

安井曾太郎 神奈川県湯河原町天野屋別荘

細川護立様 東京都文京区小石川局区内関口台町二十六

先日お手紙拝見いたしました 大観先生像／無事お手許にかえりました由安心
いたしました／大変に長い間ほんとに難有存じました 御厚／意を感謝いたし
て居ります さて小生今月十二日に上京しまして御近所の椿山荘に六時／半迄
に参りますのでその前に一寸お玄関／迄お寄りいたし度存じます 求龍堂発行
のデッサン集に長い間お借りいたしましたものを／お返へしに上るのです お
目にかゝることが出来／ましたら大変嬉しいですが若し御用がござりましたら
どうかお待ちにならない様にお願／ひ申します／毎日うつ／つという天気がつゝ
きます どうかお／からだお大切に益々お元氣をお祈り申します／乍末筆御興
様に宜敷御鳳声願ひます／先は右迄 敬具／六月六日 安井曾太郎／細川護立
様／愚妻よりもよろしく申／して居ります

一一八 封、巻紙（消印）昭和一五年四月二四日

安井曾太郎 淀橋区下落合一ノ四〇四

侯爵細川護立様 小石川区高田老松町

謹啓 御清栄の御事と存じま／す いつもご無沙汰申し失礼い／たして居りま
す 昨日はお美事／な京都の竹の子沢山頂きまし／て誠に難有存じました 一
同早／速賞味いたし 実に美味しいのを喜びました 厚く御礼申し上げ／ます
／不順の折柄何卒御身お大切／にと被遊度く其の内お暇の節／ご来遊をお待ち
申して居り／ます／先ずは不取敢以て書中御礼申／し上げます 敬具／四月二
十三日 安井曾太郎／侯爵細川護立様／愚妻よりも宜敷／申しております

一一九 封、巻紙

安井曾太郎 淀橋区下落合一ノ四〇四

侯爵細川護立様 小石川区高田老松町

謹啓 今日誠に結構なる／竹の子沢山頂難有存じま／す仲々得難い品一同喜
んで／居ります いつもお心がけに預か／り御厚志あつく御礼申し上／げます
／先日は御迷惑の儀お願ひ／いたし失礼いたしました 快く御／貸与下され石
原君大変喜／んで居りました 難有御礼申／し上げます／昨日上野の美術研究
所にて／浅野侯御所蔵の名品拝／見いたしました 小林 梅原両君にも会ひま
した／不順の折柄何卒御身御大／切に願ひます／御暇の節御来遊をお待ち／申
して居ります／先は以書中御礼申し上げ／ます／四月九日／安井曾太郎／侯爵

細川護立様／愚妻大変喜んで／居ります 厚く御礼／申して居ります

一二〇 封、巻紙（消印）昭和一二年一月一九日

安井曾太郎 淀橋区下落合一ノ四〇四

侯爵細川護立様 小石川区高田老松町

謹啓 昨日はお角力御招待／に預り大変面白く拝見いたしま／して大喜びでござ
ります 難有御礼申し上げます 小生不相変小品制作にて困つてゐます こ
の頃は議会前にて定／めしお忙しい事と存じます お／暇になりましたらご来
遊をお待／ち申して居ります／梅原君は昨夜九州へ立つ様／に云つてゐました
児島君もう／そろ／上京だろうと思ひ／ま／す／先は右御礼申し上げます／
敬具／一月十八日／安井曾太郎／侯爵細川護立様／愚妻よりもよろしく申／居
ります

一二二 封、巻紙（消印）昭和一四年七月一二日

安井曾太郎（封裏写真欠）

侯爵細川護立様 小石川区高田老松町

謹啓 一昨日は久し振りのご来遊に／て誠に懐かしく喜びました／然し何もお
見せるものなく失／礼いたしました 本日はお国か／らのお美事なる鮎沢山
頂き／まして難有存じました実に清／く美しき魚何んだか食する／事惜しい様
に思はれましたが／只今一同にて賞味いたしました あ／つくお礼申し上げま
す／暑さの折柄御自愛の程お願／ひ申します／先は右御礼まで 敬具／七月十
一日／安井曾太郎／侯爵細川護立様／愚妻よりもよろしく申／して居ります

一二三 封、巻紙（消印）昭和一七年一〇月五日

安井曾太郎 東京市淀橋区下落合一ノ四〇四

侯爵細川護立様（※筆者注記）「東京市小石川区高田老松町へ廻送下さい」とい

う旨の紙が貼り付けてある

謹啓 雪の妙高の美しいお／葉書拝見いたしました 満／州国への拙画お賞め
のお／言葉頂き実に実に嬉し／く難有御礼申し上げます／お言葉によつて非常
に勇氣／づけられ明るく元氣に次／の仕事に着手出来ます／事を喜び感謝いた
して居／ります／赤倉のよき空気がよき温／泉が御神経痛の全き御／快方に充分

役立つ事をお祈／の申して居ります初秋／の妙高定めし美しい事と／思つて居ります／児島君九日に朝鮮に立つ／それで留守中少々淋し／くなりま／す／拝借のお絵十一月末にはお／返へし出来る事と存じま／す何卒それ迄宜敷お願／申し上げま／す／取り扱ひ充／分注意する様／のたので置きました（後略）

一一三 封、便箋（消印）昭和二年七月二〇日

安井曾太郎 神奈川県湯河原町天野屋別荘

細川護立様 東京都文京区小石川局区内関口台町二十六

拝啓 其の後大変御無沙汰いたしました 此の間内／は随分いやな天気がつきおみ足いかゝかとお安（ママ）／じ申して居りました 先日白洲さん（次郎―※筆者注）お宅に兩人にて参り／ましたら入れちがひに東京におかへりになつたことを承／知しまして実に残念に存じました／鶴川の春と秋はすでに知り／ましたが夏ははじめてで 夏でも緑は仲々うつくしく丁／度もやの多い日でしたから一層きれいにみれて愉快でした（中略 虎屋羊羹への御礼―※筆者注）／学校が休みになり気が楽になつています 桃をもらひ／したので描いていますが他の雑用で邪魔されまして作／画一向に進まずお手本はどん／くさつて行き気ばか／りあせています 今年街の展覧会を休んで仕事／らしい仕事をしたと思つて／いますが どうも仲々出来／ないで居ります／大分暑くなりましたどうか御自愛をお祈り申します／大変おくれまして失礼いたしました 不取敢御礼迄 敬具／七月一九日／安井曾太郎／侯爵 細川護立様／愚妻よりもよろしく申して居ります

一二四 封、巻紙

安井曾太郎 記載無

侯爵細川護立様 記載無

謹啓 お美事な京都松茸沢山頂戴／いたし 誠に難有存じます（□□）今夜頂／き度楽しみにいたしております 厚く御礼申し上げます／先日は失礼いたしました やはり金太郎氏の□□□□今もまだ眼に残つてゐます／先は右御礼まで 安井曾太郎／侯爵細川護立様 愚妻よりも宜敷／申して居ります

一一五 封、便箋（消印）昭和二年五月二十六日

安井曾太郎 神奈川県湯河原町天野屋別荘

細川護立様 東京都関口台町二十六

お手紙拝見いたしました「金蓉」国立近代美術館／に納まりました由大変嬉しく存じました 峰子さんへ／の御厚意実に難有存じました 峰子さん（※筆者注―東京国立近代美術館所蔵（金蓉（一九三四年）の像主 小田切峰子）は定めし／喜んでいられることと存じます ほんとに難有存じ／ました あつく御礼申します／御所蔵の大観先生像お断りもせずカーネギー／展に出品いたしまして誠に失礼いたしました 近い内／にかへつて参ります由 随分長い間拝借い／たし定めし御迷惑なりしことと申訳けなく（ママ）存じて居／ります 先日カーネギー展のWagburn氏から小生の／方へも礼状がありました 貸して下さつた細川護立／様へも感謝状を出したと書いてありました（後略 羊羹への御礼、細川の妻への挨拶―※筆者注）

一二六 封、巻紙

安井曾太郎 記載無

侯爵細川護立様 記載無

謹啓 先日は御丁寧なるお／手紙を頂きまして大変喜んで／居ります 早速御返書差し上げ様と思ひながら 此の頃毎日のように仕事に追はれてゐまして／誠に失礼いたしました 何卒お許し願ひます／旧作はどこへも出／さず／所持いたして居ります その／内額縁屋へも行つて来たいと／思つて居ります 先日児島君／にも見せました 児島君は二／十日過ぎには帰つて来るそう／です から其の節には是非御／来駕お待ち申して居ります／又それ以前でもお通りがかり／の際には何卒お立寄りくださいます様お願ひ申し上げます／先日みづゑ新年号の為／「犬吠崎の夕」ご貸与に預り難有存じました 本日先方より返／へして参りましたから御届申し／上げます 御調べの上お受取／願ひ上げます／何れみづゑ新年／号出来の上はお目にかける事／と存じます（後略）

一二七 封、便箋

安井曾太郎 記載無

侯爵細川護立様 記載無

謹啓 侯爵には御風邪の由児島君から承りましたが／如何でいらつしやいます
でしょうか（ママ） 寒さ厳敷折柄どうか／お大切にお早き御全快をお祈り申して
居ります 小生お／陰様にてすつかりよくなりまして昨夕当地参りました（マ
マ）暫／らく滞在のつもりで居ります／昨年来は一水会出品の為にお絵御貸与に
預り誠に難有／存じました 以お陰会も無事閉会先日返送して参りましたが 小
生／まだ入院中にてお返へし体大変延引いたし失礼いたしました使／の者をも
つてお届け申し上げます お調べの上何卒お受取／り願ひます／先日高野氏病
院にお見舞下され慰屈（ママ）いたして居り／ましたところにて愉快な時を過し
大変喜びまし／た高野氏すつかりふとられお元氣にて嬉しく存じました／帰京
拝眉を樂しみにいたして居ります／（後略）二月十四日

一一二八 封、巻紙

安井曾太郎 記載無

侯爵細川護立様 記載無

謹啓 父 死去に際し御鄭／重なる御供物頂戴仕り難／有存じ候 早速仏前に
相供／へ御厚志の程感謝仕り候／不取敢以書中御礼申上候／敬具／十二月
二十八日／安井曾太郎／はま／侯爵細川護立様

一一二九 封、巻紙

安井曾太郎 記載無

侯爵細川護立様 記載無

謹啓 其の後おかわりござり／ませんか お伺ひ申し上げます／さて例のお御
帯とお羽織裏／何分はじめての事にて／全く調子が分らずすつか／り失敗いた
しました 何卒お／許し願ひます 殊にお御帯は／ごてくになりましてしめら
れ／ない誠にきたない帯になり／何共申訳けなく存じます この美しい白地
の羽二重は無／地の方がはるかに美し／くほんとおしい事をいたしま／した
どうかとこえかへおしま／ひ願ひます 何れお目にかゝり／申し上げたいと存
じますが不／取敢以書中おわび申し上げます 敬具／三月十三日／安井曾太
郎／侯爵細川護立様／愚妻よりもよろしく／申して居ります／よい勉強になり
ました

（※筆者注 細川からの依頼で下絵を描いたものか、帯と羽織を制作。失敗してしまったようで、その

謝罪。）

一一三〇 封、巻紙

安井曾太郎 記載無

侯爵細川護立様 記載無

謹啓 只今は高野氏より拙作／水蜜桃図画料三千円也態々お届けに／預り誠に
難有厚く御礼申し／上げます またその上御丹精の／茄子ととまと沢山頂き難
有／存じます 美しい野菜一同大変喜んで居ります 眺めて感／心して居りま
す 厚く厚く御／礼申し上げます／先日は御馳走になりまして／難有存じまし
た 久し振りに／グリルに参つたのです 十日／に立つて行つて参ります／不
順の折柄御身お大切に祈／つて居ります／不取敢以書中御礼迄 敬具／九月七
日／安井曾太郎／侯爵細川護立様／二伸／妙高デッサン帰京の上額縁／見計ひ
お届けいたすつもりで／居ります 愚妻よりも宜敷／お礼申して居ります

一一三一 封、巻紙

安井曾太郎 記載無

侯爵細川護立様 記載無

（前略）只今は高野氏態々／お越し／下され結構なお品頂／戴いたし誠に難有存
じます／早速仏前に相供へました／厚く御礼申し上げます／先日はお角力のお
場所を頂／きながら突然の旅行にて失／礼いたしました 大変残念に／存じま
した／（後略）

一一三二 封、便箋

安井曾太郎 記載無

侯爵細川護立様 記載無

（筆者注記）名刺が同封されている。「御所蔵の拙作『上高地晩秋図』一水会出品
の為に正に拝借仕り候」とあり。

（※筆者注）一九四二年九月の一水会第六回展のため、細川が所蔵している安井作
《上高地晩秋図》を貸与。

一一三三 封、巻紙

安井曾太郎 記載無

侯爵細川護立様 記載無

謹啓 / 昨夕は誠に失礼いたしました／した色々と難有存じました／喜んで居ります
す あの花の作品／も出来ましたらまた御覧に入／れるつもりで居ります 尚
其／節お願ひ申しました一水会大／阪展へ拝借の「焼岳」乍御／面倒この手紙
持参の者にお／渡し相成り度お願ひ申しま／す／一水会大阪展会期／於朝日会
館／昭和十七年一月九日より十八日迄／宜敷お願ひ申し上げます 敬具／十二
月十一日／（後略）

（※筆者注記）

細川所蔵の安井作「焼岳」を貸与。自作を一水会大阪展に出品するため。

「焼岳」は一九四一年九月の一水会第五回展にも出品されている。

一一三四 封、便箋

安井曾太郎 記載無

侯爵細川護立様 記載無

謹啓 先日大観会にて失礼いたしました 其の節／拝借をお願ひ申し上げまし
た 御所蔵の拙作座／像（扇子を持つ夫人像）何卒帝劇画廊の川辺氏に御貸与 相
成度 お願ひ申し上げます／展覧会 於帝劇画廊 四月十日より十九日まで／
先は以暑中御願ひまで 敬具／四月二日 安井曾太郎（印）／侯爵細川護立様
愚妻よりも宜敷申し／て居ります

（※筆者注）一九四三年四月丸の内帝劇画廊内で行われた藤島武二、梅原龍三郎、
安井曾太郎作品鑑賞会。安井は、「縫い物する若き女」（一九一三年）、「F嬢像」
（一九二九年）、「鶴原風景」（一九三五年）、「菊」（一九四〇年）、「三宝柑」（一九四一年）を
出品。本書簡において言及されているの（「F嬢像」のこと）。

一一三五 封、便箋

安井曾太郎 記載無

侯爵細川護立様 記載無

其の後ご無沙汰いたして居ります おかわりござり／ませんか 只今はお美事
な竹の子沢山頂きまして／誠に難有存じます きれいな竹の子だと拝見して／

ゐます 小生この間中からへんとうせんをを痛めま／してもうよろしいのです
が 旅行前にて大事をとつて／臥せて居りますので 乱筆にて失礼いたしま
す／右御礼申し上げます 敬具／四月十二日／安井曾太郎／侯爵細川護立様

一一三六 封、便箋

安井曾太郎 淀橋区下落合一ノ四〇四

侯爵細川護立様 小石川区高田老松町七六

謹啓 先日は失礼いたしました 其の節の／お写真只今児島君から頂拝見／面
白く実によく撮れてゐますので好記念／喜んでおります 難有御礼申し上げま
す／昨日、今日はお寒い様です どうかお軀お／大切に願ひます 愚妻よりも
宜敷申して／居ります／五月二十五日 安井曾太郎／侯爵細川護立様

一一三七 封、便箋（消印）昭和一五年五月二六日

安井曾太郎 淀橋区下落合一ノ四〇四

侯爵細川護立様 小石川区高田老松町七六

謹啓 先日は失礼いたしました 昨日児島／君から御来遊の由態々お電話頂ま
し／て難有存じました 生憎上野へ出かけて居りましたので／誠に失礼いたし
ました 奉祝／展の出品作（三十号）夏中努力いたしまし／たが遂に失敗しまし
てその前に描きまし／た（同じモデルで 十五号を借りて出品す／る事にいたしま
した 三十号が無事に出／来ましたら御覧に入れるつもりで居りまし／たので
すが駄目になりました残念に思／つて居ります 何卒不悪お思召し願／ひます
お暇の節には御光来をお待／ち申し降ります 敬具／九月二十四日

（※筆者注）一九四〇年の紀元二千六百年奉祝美術展覧会に出品した「黒扇」の件。

一一三八 封、巻紙（消印）昭和一六年一月二二日

安井曾太郎 淀橋区下落合一ノ四〇四

侯爵細川護立様 小石川区高田老松町七六

謹啓 二三日前から急にお寒／くなりました／皆様おかわりござりませんか／
お伺い申します 先日はお角／力誠に難有ござりました あ／のよい場所での
見物実に力／が入りました 難有厚く御礼／申し上げます あ／の翌日お目／に
かかる事が出来まして嬉しく／存じました 早速お礼を申さねばなりませんで

したのです／が ついのびくになりまして失／礼いたしました 何卒お許し願
ひます／お暇の節にはご来遊をお待／ち申して居ります／一月二十二日／安
井曾太郎／侯爵細川護立様／愚妻よりも宜敷／御礼申し上げて居て居／ります

一三九 封、巻紙（消印）昭和十七年四月一日

安井曾太郎 淀橋区下落合一ノ四〇四

侯爵細川護立様 小石川区高田老松町七六

謹啓 先日は失礼いたしました／さて乍突然今度求龍堂石／原君が穹窿会第一
回観賞／会を左の通り開催いたしますに／つきまして御所蔵の拙作「奥入瀬の
溪流（二十五号位）を同展／出品の為拝借をして頂ければ／甚だ幸ひに存じますが
如何で／ござりましょか おさし支えな／ければ宜敷お願ひ申し上げます／若
し同画おさし支へでありまし／たら他のお絵御選定下さいま／しても結構でござ
ります／御都合よろしければ四月四日頃／石原君小生の名刺を持つて拝／借
に参上いたしますから乍御迷／惑何卒宜敷お願ひ申し上げます／この頃はあ
つくなつたり寒くな／つたり仲々不順です 何卒御自／愛の程祈つて居ります
／穹窿会第一回観賞会／石原求龍堂主催／会期四月五日―八日／会場 銀
座・資生堂／出品は左の物故作家及び現代／作家の作品／岡田三郎助 黒田清
輝／青木繁 浅井忠／岸田劉生／梅原龍三郎 藤島武二／藤田嗣治 坂本繁二
郎／安井曾太郎／何卒宜敷お願ひ申 し上げます 敬具／四月一日／安井曾太
郎／侯爵細川護立様／愚妻よりも宜敷／申して居ります／二仲／先日は態々連
袖会御覧下され／ました由誠に難有存じます喜／んで居ります

一四〇 封、巻紙（消印）年不詳十一月一日

安井曾太郎 淀橋区下落合一ノ四〇四

侯爵細川護立様 小石川区高田老松町七六

謹啓 鹿兒島よりのおた／より頂きまして喜んで居ります 御きげんよろし
き御／様子何より大慶に存じます 列車直通にて鹿兒島／はさだめしにぎやか
なると（ママ）／存じます 小生お蔭様にて元／氣に仕事して居ります／今度高
島屋の展覧会／に出さねばなりませんので／静物小品を描いて居りま／す／児
島君もうそろ帰京／の事と存じますまたお暇／の節お立寄りをお待／ち申して
居ります

一四一 封、便箋（消印）昭和二十三年四月一日

安井曾太郎 新宿区下落合一ノ四〇四

侯爵細川護立様 文京区高田老松町七六

すつかり春暖になりました お元氣の御事と存じます 先日は誠に／失礼いた
しました 玉子沢山頂きまして一同大喜びいたしました さて／突然ですが今
度信州の諏訪美術館で展覧会があり／ますのでそれに御所蔵の「松と睡蓮」を
拝借出品いたし度く／存じまして 小生の名刺を係の人に渡しておきました
が若／しその人が参上いたしましたら 乍御迷惑／同画を御貸与／相成り度く／
何卒宜敷御願ひ申し上げます／こちらの方面御通過の節には亦お立寄り下され
度お待／ち申して居ります／先は乍失礼以暑中御願ひ迄 敬具／四月十四日／
安井曾太郎／侯爵細川護立様

一四二 封、便箋（消印）昭和二十六年二月二七日

安井曾太郎 神奈川県湯河原町天野屋別荘

細川護立様 東京都文京区小石川局区内関口台町二十六

拝啓 いつも御無沙汰して居ります 昨日は長門の美しいお／菓子 態々お送
りに預かり誠に難有喜んで居ります いつも／ながらの御厚志心から厚く御礼
申し上げます 先日御所／蔵／の拙作「大観先生」の出品御承諾頂き難有存じ
ました／其の後毎日の船戸君に会ひました時御厚意を伝へました／ら大変喜ん
で居りました 其の内社からもお願ひに上ると申／して居りました 其の節は
何卒宜敷お願ひ申し上げます／年末もおしつまつて参りました 何卒ごきげん
よく御越年／よき新年をお祈り申して居ります／先は右以書中御礼か旁々お願
ひまで（後略）

一四三 封、便箋（消印）昭和二十八年五月二二日

安井曾太郎 神奈川県湯河原町天野屋別荘

細川護立様 東京都文京区小石川局区内関口台町二十六

拝啓 本日は大変立派な虎屋ようかん沢山頂き／誠に難有存じました 早速抹
茶にて兩人頂き／喜びました あつくあつく御礼申します 先日浅野／様御披
露の節久々にてお目にか／りお元氣の御／様子を大変嬉しく存じました 上京
の時おたづねい／たし度存じながら いつも失礼いたし御無沙汰をつゞけ／て

居ります 何卒お許し願ひます 小生今度当地／の川崎守之助氏の土地を分けてもらいまして／家をたてることになりました 東京に住む勇氣／がなくなりましてこちらに落ちつくつもりになりました／今度の土地では大分高いところで買物などには今のところよりは少しは不便の様ですが眺はかなりありまして／画も描けそうで喜んで居ります／先日護貞様態々お立寄り下され大変喜びました／た何んのおかまひもいたさず誠に失礼いたしました／お孫様の御成人を実に驚きました／氣候の変わり目にて仲々不順です 何卒おからだお大／切に益々お元氣をお祈り申して居ります／先は不取敢御礼迄 敬具 安井曾太郎／細川護立様／愚妻よりもよろしく／申して居ります

一四四 封、便箋（消印）昭和二八年六月二二日

安井曾太郎 神奈川県湯河原町天野屋別荘

細川護立様 東京都文京区関口台町二十六

早速御丁寧なるお手紙頂き恐縮いたしました／先日はお忙しいところ大変長座いたしました大変／失礼いたしました 久々にてゆつくりお話出来まして／誠に嬉しく存じました 帰りには椿山荘迄お車／頂き御厚意を兩人感謝いたしました 椿山／荘ははじめてでした お料理は余りおいしくお（ママ）／りませんでした 土産の蛸の小籠をさげて帰湯しました／十九日上京 銀座で峰子さん（※筆者注 〈金巻〉の像主）に会ひしばらく話／し喜びました 博物館食堂で杉村君に会ひ／赤倉にお出かけのこと承知して大変喜びました 神経痛の御快方をお祈りして居ります 杉村君もお伺／ひする様に言っていました 本館では浅野さん（長武―※筆者注）／にお会ひしました 名鞍の展観を拝見しま／した／赤倉のよき御滞在を祈つて居ります 敬具／六月二十一日／安井曾太郎／細川護立様／愚妻よりもよろしく／お礼申して居ります

凡例…本稿に当たり、旧漢字は現行の通用漢字に置き換え、旧かなづかいは原文のまま文字起こしを行った。「／」は行替えを示す。なお本来的にスペースないし句読点を置くべき箇所も安井は書き詰める癖があり、これはそのままとしてある。逆もまたしかりである。

(1) 梅原書簡については、現在、全書簡の撮影と翻刻の準備中である。

(2) ただし児島喜久雄宛てのもの。筆者の考えでは、細川と児島は東京美術学校改革を協働のかたちで行っている。その証左として古径ならびに安井の児島宛書簡が細川・安井間の書簡に紛れ込んでいることが挙げられる。

(3) 拙稿において書簡の時系列の順序を誤って記載したので、ここに訂正を示す。(二)までの序列は正しい。以下、(三)↓(二六)↓(二七)↓(二八)

↓(一九)↓(二〇)↓(二七)↓(二六)↓(二二)↓(二四)↓(二五)↓(三二)

↓(三三)↓(三四)↓(三八)。(三五)は時節不明である。調査時から二〇年の長きにわたり、時系列によってではなく、一から五の束に分けられた永青文庫での序列を重要視して研究を進めてきたため誤りが生じた。記して諸方に深くお詫びする。

(4) 一、一、一、一、一三に関しては一一の完全な翻刻を含め、筆者の調査の後、三宅秀和氏（群馬県立女子大学）によって既に紹介されている（三宅秀和「永青文庫 美の扉（七九）『承德の喇嘛廟』の制作と安井曾太郎書簡」、『茶道の研究』第五九巻第七号、二〇一四年七月）。三宅氏のご理解をいただき重ねて紹介するものである。記して氏に謝意を表する。

【謝辞】

永青文庫を含む諸機関ならびに研究者、学芸員、司書等の専門職の皆様のご協力なくして、筆者の研究は成り立たない。ここに記し、以て深甚なる謝意を表する。